

学校から帰るときに見上げた冬の空。夜空を見上げると、多くの星たちが見えることがあります。あれは冬の大三角オリオン座の赤い1等星ベテルギウス、白くて大きく光っているのがシリウスだったっけなというレベルではありますが、遠い宇宙を感じる瞬間です。

## 豊かな発想が未来を変える

平成31年1月18日宇宙航空研究開発機構(JAXA)は、7基の人工衛星を載せたイプシロンロケット4号機を打ち上げました。その中でも異彩を放っていたのが、ベンチャー企業のALE(エール)。人工的に流れ星を再現し、地上にいる人に宇宙を舞台にしたエンターテインメントを提供しようとしている企業です。ALEの創設者でもある岡島礼奈代表は「実際に複数の流れ星が同時に『流星群』として流れるのを見たい」と人工流れ星の事業化を考え、創業されたそうです。実はこの方は鳥取県鳥取市の方です。

昨年話題となった「はやぶさ2」は、遥かかなたの小惑星から持ち帰った貴重なサンプルを地球に届け、次のミッションに向けて地球を離れていきました。はやぶさ2が目指した小惑星「リュウグウ」は太陽系が生まれた頃(今から約46億年前)の水や有機物が、今でも残されていると考えられています。地球の水はどこから来たのか、生命を構成する有機物はどこでできたのか、惑星がどのように生まれたのか、太陽系の誕生と生命誕生の秘密に迫るミッションだと言われており、これからの分析結果が大いに期待されています。

私が小学生の頃、アポロ11号アームストロング船長が、月面に降り立ち人類の大きな一歩を踏み出した映像をワクワクしながら見ていました。大阪万博のアメリカ館でアポロ11号が持ち帰った月の石を見て興奮したのを覚えています。その約50年後に、世界初の民間による月面探査レースを目指し、月面探査機の開発していた多国籍のハクトというチームは、月面にとっても似ている鳥取砂丘を舞台に、AR技術を使って月面探査のミッションを疑似体験できるようにすることを考えています。目指しているのは月での生活です。

どのミッションも困難の連続だったそうですが、夢見た人がいて、それに賛同する人が多国籍で集まり、議論し実現に向けて行動に移す。これから進んでいく世の中を凝縮した世界のように思います。



近い将来、空を見上げた遠くの星がもっと身近になり、月や火星に人が住み生活している時代が来るかもしれません。これからの時代を生きる子どもたちには、目の前の小さな狭い世界だけに閉じこもっているのではなく、豊かな発想と広い世界に目を向け好奇心を持ってチャレンジしていく人に育ってほしいと思っています。

地球の400Km上空を回っている国際宇宙ステーション(ISS)では、今も日本人の若田光一さんが実験や研究を行いながら宇宙での長期滞在に挑戦しています。夜の星を見ると、これからどんな世界が始まるのかワクワクしてきます。